

氏名	寺川 泰弘
学位の種類	博士（文学）
学位記番号	博 乙 第 2933 号
学位授与年月日	令和元年9月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
審査研究科	人文社会科学研究科
学位論文題目	『楽園の梯子』における祈りと愛—ヨアンネス・クリマクスの霊性論—

主査	筑波大学 教授	博士（文学）	桑原 直巳
副査	筑波大学 教授	文学博士	伊藤 益
副査	筑波大学 教授	文学博士	保呂 篤彦
副査	中央大学 教授		土橋 茂樹

論文の要旨

本論文は、シナイの聖カタリナ修道院の修道院長ヨアンネス・クリマクス(579年以前-649年頃)が著したキリスト教霊性史における古典的著作『楽園の梯子 *Scala Paradisi*』(以下、『梯子』と略記)の全体像の解明を試みたものである。『梯子』はイエス・キリストが三十歳で洗者ヨハネから洗礼を受けて公的な宣教活動に至った時を霊的な結実に達したとして、そこに至るまでの道程を修道士たちの辿るべき全三十段の階梯として、クリマクスが自らの修徳修行の実践に基づく体験を織り交ぜながら、修道の道筋を示した著作である。

『楽園の梯子』についての背景理解」と題する第一章では、古代世界において「神への思慕」ゆえに極端な禁欲的霊的修行に身を投じた修道士の在り様を、当時の神学者たち、あるいは自身もそのような修行者である霊的指導者（師父）たちに依拠して概観している。その上で、ヨアンネス・クリマクスの人物像、『梯子』の成立の経緯とその構造、各梯子に意義づけられた徳とその関連性を考察しつつ、その書に織り込まれたシナイの霊性に育まれた彼自身に体现された霊性の特徴を明らかにしている。

第二章から第四章にかけて、『楽園の梯子』の最初の階梯群の検討を通して、修道士がいかにこの世から離れて行くものとされているのかを具体的に明らかにしている。

「第一の階梯『この世の放棄』について」と題する第二章では、「この世の放棄」が主題として掲げられ、修道の初めに立つ修道士に対して徹底したこの世との関係の放棄が要求されていることの意味について検討している。特に、この段階における核心は、今まで纏い続けてきた社会的な衣装を脱ぎ捨てて、神へと全面的に己を差し出し、神に依拠する姿勢を求められる点にあったことを明らかにしている。

「第二の階梯『欲望から超然としていること』について」と題する第三章では、家族への郷愁を引き起こす絆を断ち切ることへの要求について取り上げている。両親や血族関係はこの世とのかかわりの中でもっとも去り難く残るものであり、修道士にとっての険しい障碍となる。本章は、これを克服することにクリマクスが見出す意義を解明している。また、この場面でクリマクスは金銭欲や名誉欲等の欲望を断念させることについて

集中的に論じている。欲望から超然とすることによって己を捨て去り、神に一心に向き合うこと、真にキリストに信従することに繋がって行くからである。さらにクリマクスは、こうした修道士にとって修友の共同体が真の家族であると示唆していることを明らかにしている。

「第三の階梯『この世の寄留者となること』について」と題する第四章では、靈的修行者として「この世の寄留者」となり、神の前に立つ人間となって行くまでにおける、その葛藤と超出との過程についてのクリマクスの叙述を検討している。クリマクスは、パウロの言葉に依拠して修道士が本来的に住まうべきところは、この世なのか、天であるのかを問う。当然、それは「天」であるべきなのだが、クリマクスは、この世に留まってどこまでも神の意思に信従するという深い敬神に支えられた生の在り様のうちに、この世にあって天に住まうことになる修道士に教えていることを明らかにしている。

第五章、第六章では、修道士が「階梯」を上って行く過程における重要なポイントを二点取り上げて、解明を試みている。

「徳の実践の土台である『ペントス』について」と題する第五章では、東方キリスト教の根幹をなす、「罪に塗れた自分自身を神の前に投げ出して悲しみ嘆くこと」（ペントス）に焦点を当てて、その働きの意義、またペントスがどのようにして靈的な成長を抜いて行くとされるのかを考察している。

クリマクスにとって、「悲しみ嘆くこと」（ペントス）は、不断に絶えることのない修練のうちに彼の生全体が依拠しており、日々、神の声に従って神へと向かう靈的な苦闘を祈りのうちに闘い抜くことによって、今ある自己を超え出て、神へ近づいて行こうとする修道士の生にとって本質的な意味を有していた。クリマクスは、「この世の放棄」という超え難い障壁を乗り越えて行くという修道士に対する要求、さらには、待ち受ける次なる諸徳の獲得への実践の途にとって、「悲しみ嘆くこと」（ペントス）は導きの光であることを教え示していることを明らかにしている。

「諸々の罪とその克服—神への傾注—」と題する第六章では、様々な諸相を通じて襲い来る悪魔との相克を経て、罪を嘆き、神を仰ぎ見る生への向き直しに否応なく迫られる場面についてのクリマクスの教えを明らかにしている。そこにおいては、諸々の罪との相克があり、それをどう克服すべきかが問題とされている。様々な相貌を見せて修道士に襲いかかる「悪魔との闘い」を通じて、情念やファンタシア、そして我執が祈りを通じて鎮められていく過程についてのクリマクスの描写を明らかにしている。

第七章以降では、『楽園の梯子』の最終段階に位置する階梯群の検討を通して、修道生活の成果に対するクリマクスの展望を概観している。

「クリマクスにおける『ヘシュカストの祈り』とは何か」と題する第七章では、修道士が何もかも捨て去った後に不受動心(アパテイア)の境地に辿り着き、神を観想する世界が披かれた場面に対するクリマクスの教えの意味を解明している。特に東方キリスト教靈性史を特徴づける「ヘシュカスム(静寂主義)」の系譜を辿り、概観することを通じて、クリマクスにおける「ヘシュカストの祈り」の意義と後世への影響史を解明している。さらには、東方固有の救済観であり東方神秘思想の根幹概念とされる「神のエネルゲイア(働き)」によって披かれる「神化」について検討している。

「神との一致—観想的生への変容—」と題する第八章では、クリマクスの言う「ヘシュカストの母は信仰」であり「信仰は祈りの翼」であるとされていることの意味を明らかにし、その「祈り」こそが「信・望・愛」へと連鎖し、「神との合一」へと修道士を辿り着かせることの重要な披きを担うものである、とするクリマクスの思想の意義を解明している。

「ヨアンネス・クリマクスの靈性の極まるどころ—『祈り』と『和解』への執り成しとしての『愛』—」と題する第九章では、本論文の核心であり、ヨアンネス・クリマクスの靈性の極まるどころである、第三十の、つまり最後の階梯である「愛」とは何かを解明している。特に、「愛」が、人間と神との「和解」を実現する

ために、いかにして執り成して行くのか、ということについてのクリマクスの論を解題し、そのことによって、『梯子』における「祈り」と「愛」とは何かという問いに対する最終的な答えを提示している。

審 査 の 要 旨

1 批評

ヨアンネス・クリマクスの『樂園の梯子』は、東西を問わずキリスト教霊性史における古典としてその名が知られる重要な著作であるにもかかわらず、実際にはその内容は具体的には知られてこなかった。本論文は『梯子』について詳細かつ包括的に分析を試みた国内初の研究である。国際的に見ても、『梯子』の全貌について扱った研究は K・Ware による英訳の Introduction の他には見当たらない。本論文の著者は、『梯子』の全邦訳（無論、本邦初である）を別途完成しており、本論文は著者独自の視点からその全体像の解明を試みたものである。『梯子』のテキストそのものも未だ完全な校訂版が存在せず、翻訳に際しても古注等から解釈を補う必要があるなどの研究上の困難がある。また、日本で知られる「キリスト教」は西方的キリスト教（カトリック、プロテスタント）であり、そもそもクリマクスが属する東方キリスト教の伝統自体がほとんど知られていない。その意味で、著者の仕事には高い学術的価値があるものと考えられる。

特に、『梯子』は、厳しい禁欲的修行をこととする修道士に向けてその「師父」が語る、というきわめて特殊な文脈を背景とする著作であり、また文体的にも比喩的・修辭的表現が多用されており、一般人の理解を困難にしている面がある。本論文は、そうした『梯子』が一般の現代人に対しても一つの「問いかけ」として持ちうる意味を提示すべく解明を進めており、そのために著者が払った努力は高く評価するに値する。

ただし本研究には課題も残っている。

まず、上述した『梯子』の性格から来る研究対象としての困難、さらには著者の情熱が先行した結果、著者自身による客観的叙述となる地の文もやや修辭的な文体に流れてしまっている感がある。また、クリマクスのテキストの翻訳部分に関して、さらなる解釈上の検討と訳文の彫琢の余地を窺わせる箇所が散見される点でも課題が残る。

しかしながら、これらの課題は、クリマクスの『梯子』の包括的な意味について可能な限りにおいて明瞭に探求を試みた本論文のすぐれた学術的成果としての価値を損なうものではない。ゆえに、本論文は博士学位請求論文として十分な学術価値を有するものと認めることができる。

2 最終試験

令和元年7月23日、人文社会科学研究所学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと、本論文について著者に説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行った。なお、学力の確認は、著者が「人文社会科学研究所論文審査等実施細則」第10条(1)に該当することから免除し、審議の結果、審査委員全員一致で合格と判定された。

3 結論

上記の論文審査ならびに最終試験の結果に基づき、著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。